

独創的な写真を求めて

栗林 慧



最近、わたしは写真家として主な被写体を最初から昆虫に定めてやってきたことがほんとうに幸運だったとつくづく思っている。

他のいかなる分野の写真を目指したとしても、よろこびや感動といったものをこれほど長時間持続させることは、とうていできなかったにちがいないからである。カメラで昆虫を追うようになってからの、この三十五年間というものの常にワクワク・ドキドキの連続であったといっても、けっして誇張ではない。まさしく、その通りだったのである。

その間に、まだだれもなし得なかった撮影技術を開発し、だれも発表したことのない表現をものにしてきたが、それが可能だったのは、昆虫という小さな生き物を相手にして、その生態をいかに正確に、いかに新

しい映像として表現するかを常に全身全霊で考え続けてきたからである。

一般に写真家は、作画するための道具としてカメラからレンズ、さらにはフィルムにいたるまで、メーカーが作り出す製品に頼っているのが普通である。しかし、そういうことでは個人の感性による多少の表現の差こそあれ、創作の名に値する作品を産み出すのはむずかしいのではないだろうか。写真の草創期ならいざ知らず、現代においては、考えられる撮影テクニックのほとんどは過去のものに過ぎない。言い換えれば、前人が作り出したテクニックに則って作画しているに過ぎないのではないだろうか。

わたしに言わせれば安易ともいえるそのような姿勢を拒み、「絶対にまだ可能性があるはずだ！」と常に望みを託して挑戦し続けてきたのがわたしの生きざまだといってよい。

昆虫が見ている世界を、昆虫の目になってそのまま表現することができたらどんなに楽しくすばらしいことだろう——こんな夢を長いあいだ見続けてきた。(中略)

マクロの世界を撮影してこのような表現を可能にした写真家は、長い写真の歴史においてこれまでひとりもいなかったと思う。写真家ならだれでも望むはずのこのような表現がこれまでに得られなかった原因は、先にも述べたように、それを可能にするための道具であるカメラや

レンズがこれまで存在しなかったからである。

話はやや横道にそれるが、二十年ほど前にビデオカメラが普及しはじめたとき、わたしは早々とその魅力あふれる新機材を手にとった。もともと新しいものに対して強い好奇心を抱く性格であることに加えて、動画に対しては以前から強い興味を持っており、ビデオの持つ将来性をそこに感じたからである。

ビデオ画像がどんどん進化していけば、やがては一秒間に三十フレーム撮影される画面のひとつを抜き出して一枚の写真として使えるようになるだろう。モータードライブを用いて動きの速い昆虫を撮影していたそれまでの経験からいって、これは昆虫の生態を記録する方法としてきわめて有効な手段になるだろうと確信を持って予測できたのである。その夢は、ハイビジョンカメラが扱えるようになった今、八十パーセントは実現したといえる。

さて、話を元にもどすと、じつはこのビデオカメラこそがわたしのスチールカメラの夢を実現するうえで大きく貢献することになったのである。ビデオの世界にはスチール写真の世界にはない特殊なレンズが数多く存在する。わたしはこれらのレンズ群と、以前に試みたことのある医学用内視鏡とを組み合わせて、新しいカメラを制作した。自ら「超被写界深度接写カメラ」

（略して超深度接写カメラ）あるいは「虫の目カメラ」と名付けたこのカメラは、目の前の小さな昆虫を接写しながらその奥にひろがる広大な風景にもピントが合っているという、これまでの写真の常識ではおよそ考えられない映像をもたらしてくれたのである。（中略）ここに到達するまでに、構想以来二十年の歳月が流れていた。

長い歴史の中で、度重なる技術改良を加えられ、科学技術の粋を集めて作られた世界中の無数の市販レンズ。そのどこにも存在しないレンズを、自分の手で完成させた感激はひとしおである。しかし、それよりも、このレンズを通して得られた作品が多くの人に驚きと感動を与えていることを思うとき、わたしの体の中をたどえようなない痛快感が駆け抜けていく。

三十五年にわたる写真人生の中でこのような感覚に浸ったのは、はっきり意識しているもので他に三度ある。最初は、改造ストロボを用いてアリを主とする微小昆虫の生態撮影技術確立したとき。二度めは、光センサーを日本で初めて撮影に取り入れた昆虫の飛翔の撮影。そして三度めは、医学用内視鏡を応用したレンズを製作して、狭い空間内で行動するハチなどの撮影に成功したときである。

わたしの作品の多くは、こういった撮影技術を他に先がけて確立しながら撮影してきたものであり、見る人には単なる昆虫写真とは異なるものとして感じ取っていただいていと思う。

こういうことができたのも、冒頭に述べたように、被写体として昆虫を取り上げたことが大きい。

むずかしいからこそ挑戦のしがいがある。挑戦することによって可能性が開けてくる。

——言うまでもなく、これはわたしがいつもモットーとして心掛けていることである。そして、これらの撮影が実際に可能になったのは、当初の夢をあきらめずにずっと持続してきたからだと思う。

このように書いてくると、わたしの仕事の成果は、たいへんな忍耐と血のにじむような努力の結果と思われるかも知れないが、じつをいうとそんな大袈裟な苦勞をしたという感覚はみじんもない。初期のころにはたしかにそのような心構えで取り組んだ記憶も無くはないが、いつもかたくなにただただ脇目もふらず物事に取り組んでいたら、多分このような作品を産み出すことはできなかったにちがいない。

カメラやレンズといった機材を作るだけならともかく、さらにそこから作品を産み出すには、柔軟な精神がなければならない。遊び心を持ち、いつもワクワクするような期待感に胸を躍らせて自然を楽しむ気持ちを持っていなければ、人に感銘を与えるような作品はどうてい作り出せないだろう。

昆虫を相手にして幸運だったことがもうひとつある。時間的なゆとりが生まれたことだ。ご存知の通り、昆虫はほかの動物とちがって一年中活動しているわけではない。わたしが住むここ長崎でも。十一月から三月にかけては活動する昆虫が少なくなり、当然、暇ができる。そこでわたしは、余った時間をそれまであたためていたアイデアを具体化するための研究に充てることができるのである。

たとえば、日常の撮影中に、ふと、こんな装置があったら撮影が楽になるのではないとか、こんなレンズがあったらもっとちがった表現が可能になるにちがいないなどと思うことがある。そういうアイデアをあたためておき、シーズンオフに試作してみるのである。

中央から遠く離れた田舎に移転したのも、今にして思えば正解であった。少年期の途中に東京に移住して以来、写真家としての活動を始めてからの数年間まで都会暮らしを続けたが、なんといつても身近に自然が少ないのはネックだった。また、仕事が増えるのはありがたいが、打ち合わせなど撮影以外の時間が多くなるのも都会ゆえのぜいたくな悩みであり、痛しかゆしの状態だった。思い悩んだ末、意を決して、子どものころ馴れ親しんだ故郷の豊かな自然の中に身を置くことにした。

長崎県北松浦半島の突端といえ、今でもかなり不便な土地であるが、故郷にもどりたい一心で、今から二十四年前に移住を決行した。「はたしてそんな辺境に移り住んでプロの写真家として活動することができるだろうか？」という一抹の不安がなかったわけではないが、ある程度の自信もあった。というのは、そのころすでに、独自の撮影技術、とりわけ光センサーを取り入れた撮影装置によって昆虫の瞬間の行動をとらえ、それまでにはまったく見られなかった作品を発表しはじめていたからである。こういう独自の技術を持っていれば、日本のどこに住もうと、中央から見捨てられることはないだろうという思いがあった。また、日ごろの仕事ぶりを見てくれている妻をはじめとする家族の後押しがあったのも大きかった。

故郷での生活は予想以上にすばしかった。一歩家を出れば目の前に目指す被写体がいくらでもあり、思う存分撮影に専念することができた。編集者は必要とする写真を求めて遠路をいわず訪ねて来てくれた。そして、自分にとって何物にも増して重要な、数々のアイデアを熟成させる時間的余裕を持つことができたのである。

わたしの写真活動三十五年間の歴史を振り返り、思うところを手短に綴ってみたが、最後に、これから写真家をめざそうとする若い人たちに次のメッセージを贈りたいと思う。

自然を相手に作画する写真家という職業は、それで生活が成り立つことを前提に言えば、

文句なしにすばらしい。昆虫写真という限られた分野だけをとってみても、この職業にあこがれる若い人たちは少なくない。今後もそういう人たちが輩出してさらなる発展をめざし、夢と希望を持って挑戦し続けてほしいと思う。

そのときに心してもらいたいのは、作品を作るうえで、自分だけのオリジナルといえる技術や作風をひとつだけでも確実に持っていたきたいということである。これこそがプロの写真家たる者の最低限の条件であると思うからである。

情けないことに、写真に限らず、昔から日本には人まねに過ぎないものを容認してはばかりない土壌があるように思えてならない。そのような寛大さ(?)は国際的に通用しないばかりでなく、その作者の進歩をさまたげる要素になっていることに気がつかなければならない。後に続く若い人には、自分を信じて大きくはばたいてもらいたいと思う。